

ジャーナリストは作家の一種？——限定形容詞の用法の拡がり

日本語と英語の大きな違いの一つに、形容詞の数と用法の拡がりがあります。英語は日本語にくらべて形容詞の数が多く、日本語なら形容詞では表せないのに英語では形容詞を用いて表現できる場合が少なくありません(例: an old man, a little sister, I'm 170 centimeters tall)。また、形容詞の用法は一般に限定的用法(=名詞の前に置かれて「形容詞+名詞」の形で用いられるもの)と叙述的用法(=限定的用法以外の用法)に二分されますが、そのうち特に前者に関して英語の形容詞は日本語とは違った拡がりを見せています。まず、次の例を見てみましょう:

- (1) S is a tall student. (Sは人) (3) S is a white house. (Sはモノ)
(2) S is a Japanese businessman. (Sは人) (4) S is a round table. (Sはモノ)

(1)–(4)の各例において、is の補語は「a+限定形容詞(A)+名詞(N)」の形の名詞句(NP)ですが、この場合、NPの意味はたまたま隣り合ったAとNの意味を(単純に)足し合わせたものになっていると言えます。すなわち(1)–(4)ならば、一般に次の(1')–(4')が成り立ちます(ただし、 $P \wedge Q = P$ かつ Q):

- (1)→(1') S is tall. \wedge S is a student. (3)→(3') S is white. \wedge S is a house.
(2)→(2') S is Japanese. \wedge S is a businessman. (4)→(4') S is round. \wedge S is a table.

これらに対して、同じ「S is a+A+N」の場合でも、同様の含意関係が一般に成立しないものもあります。次の例を参照(×は一般にその含意関係が成立しないことを表す):

- (5) S is an old friend (of mine). ((私の)旧友) → ×(5') S is old. \wedge S is a friend (of mine).
(6) S is a literary critic. (文芸評論家) → ×(6') S is literary. \wedge S is a critic.
(7) S is a good cook. (料理の得意な人) → ×(7') S is good. \wedge S is a cook.
(8) S is a poor mathematician. (数学の苦手な人) → ×(8') S is poor. \wedge S is a mathematician.

これら(5)–(8)の場合も、NPの意味はその構成要素であるAとNの意味から導かれますが、それが(1)–(4)と同じような意味での両者の「単純和」に基づいているかというそうではありません。たとえば(5)の場合だと、A(=old)はN(=friend (of mine))としての「期間の長さ」を表しています。(6)の場合は、AはNが「関係する分野」を表します。(7)(8)では、AはNの「技能の評価」を表しています。これらからわかるように、この場合、A(形容詞)とN(名詞)は偶然に隣接しているものではなく意味的に密接に結びついたものであり、NP全体で以って一つのまとまった(熟語的な)意味を表していると言うことができます。

上では、限定形容詞による修飾構造を含む(1)–(4)と(5)–(8)が含意関係の成立に関して違いがあることを見ましたが、後者のグループに関してさらに興味深いことは、(5)(6)の場合は一般に「S is a+A+N→S is a+N」という含意関係が成り立つが、(7)(8)の場合は一般にそのような含意関係は成り立たないということです。すなわち:

- (5) S is an old friend (of mine). → (5'') S is a friend (of mine). ((私の)友人)
(6) S is a literary critic. → (6'') S is a critic. (評論家)
(7) S is a good cook. → ×(7'') S is a cook. ((プロの)料理人、コック)
(8) S is a poor mathematician. → ×(8'') S is a mathematician. (数学者)

すなわち、たとえば(6)で a literary critic と言えばそれは a critic であるわけですが、(7)で a good cook だからといってその人は a cook であることは必ずしも意味しません。前者(a good cook)は「シロートだけど料理を作るのが上手な人」のことを指すことができるからです(cf. ジーニアス英和 第4版、'cook')。この(7)(8)と同様の性質を示すものとして、次のようなものがあります(斜体部の限定形容詞に注意):

- (9) S is an *alleged* suspect in the bombing. (爆破事件の容疑者とされている人物)
(10) S is a *frustrated* actor. (俳優になろうとして失敗した人、俳優崩れの人)
(cf. ランダムハウス英和大 第2版、'frustrated')
(11) S is an *aspiring* mother. (母親になりたい人、子どもがほしい女性)
(12) S is an *expectant* mother. ((現在妊娠中で)もうすぐ出産予定の女性、もうすぐ母親になる女性)

これらの場合も、「S is a+A+N」が「S is a+N」を含意する関係は一般には成り立ちません:

- (9) S is an *alleged* suspect in the bombing. → ×(9') S is a suspect in the bombing.
(10) S is a *frustrated* actor. → ×(10') S is an actor.
(11) S is an *aspiring* mother. → ×(11') S is a mother.
(12) S is an *expectant* mother. → ×(12') S is a mother.*

(* (12)の場合は、「a motherになったも同然」と考えて、含意関係が成立するという解釈も可)

(9)の場合、*alleged*の一語を加えることによって断定を避けて、それによって「言い逃れ」ができるようにしたものです。(10)(11)は、それぞれ an actor, a mother ではないのにあたかもそうであるかのように装った表現であると言えます((10)は実際には an actor ではないのに言わば「お情け(?)」で actor の一種として扱っている表現、(11)は実際にはまだ a mother ではないのに言わばそれを「先どり」して mother の一種として扱っている表現とも言えるかもしれません)。これらの場合、斜体部の限定形容詞は、本当はそうではない(かもしれない)ものを後続の名詞が表すカテゴリーの一例として提示する役割を果たすものであり、その意味で「カテゴリーを拡張する形容詞」であると言うことができます(cf. Tomozawa 2011)。そのような形容詞 *frustrated* を用いた例を補っておきます:

- (13) Many journalists are *frustrated* novelists. (ジャーナリストには作家崩れの人が多い)

実際のところは journalists と novelists は別であると考えられますが、(13)は前者があたかも後者の一種であるかのように見える表現になっています。形容詞 *frustrated* によって、後続の名詞が表すカテゴリーが拡張された形になっています。このような形の表現は、英語の限定形容詞の用法の拡がりを示す好例であると言えるでしょう。